

特集 プロジェクトAⅡ：19世紀末から今世紀初頭における 国際秩序の形成と国民文化の変容

はじめに

渡 辺 公 三

プロジェクトAⅡ「十九世紀末から二十世紀初頭における国際秩序の形成と国民文化の変容」(代表者、西川長夫・国際関係学部教授)は、九五年度に発足し九七年度に成果の刊行をもって終了することを予定している。今回の特集は、二年度めを終える時点での遅めの中間報告といえるものである。

当初の研究計画では、前回のプロジェクトの成果である『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』(西川長夫・松宮秀治編、一九九五年、新曜社)をふまえて、明治期以後、大正デモクラシーのころにかけての世界的な秩序の形成と日本における国民国家の変容との相互関係を、とりわけ文化の面から検討することをめざして次のように提案した。

十九世紀末から今世紀初頭にかけて、日本では明治末期から大正デモクラシーのころにかけて、世界のすみずみまで植民地分割を完了した西欧を中心とした「文明の国際秩序」が成立し、また日本もアジアにおいて築いた一定の地歩を背景にその一翼に参画することになった。この国際秩序は、人類史のなかでもそれまでにない規模で飛躍的に増大した近代産業の生産力を背景に、それまでとは異質で密度の高い人的・知的な交流と商品の流通、交通の強度の向上をもたらし、それによって国際秩序を担う主体としての、各国の国民文化の変容をも促した。国民文化の相互交流と相互浸透すなわち均質化への傾向と、国民文化相互間の差異意識の尖鋭化という一見逆方向のベクトルが同時に働く現代文化の様相は、この時期にすでに胚胎したともいえよう。

この研究プロジェクトは、こうした現代文化の動態の発生期の全体像を、文学、歴史学、科学史、思想史、経済史、人類学などさまざまな領域の共同研究によって多角的な視点からとらえ描き出すことを試みる。そのために、文明の国際秩序の成立過程を、国語と文学表現の洗練、国民文化表象の生産・流通・循環・定着の過程としてみる視点から、

- ①日本における国民意識あるいは日本人の同一性の形成と変容
 - ②日本を中心として、各文明諸国間での文化情報の相互摂取
 - ③文明諸国と、それに植民地化された被支配文化との間での相互影響
- という三つの軸から探究する。

以上の趣意にしたがって、より具体的な主題を次のようにいくつかのグループにまとめようと考えた。

- －明治末期以降の日本人の西欧文明体験、アジア体験と文学表現の展開
- －十九世紀末からの知の国際化・権力システムの国際化
- －国民文化から帝国文化への変容

こうした三つの主題群は、いうまでもなくそれほど厳密に組み立てられていたわけではなく、研究会での諸報告はさまざまな領域にわたる多様なものとなり、国民国家論を基軸とした近現代史の読み直しの豊かな可能性と、国民国家論そのものを一層深める可能性とを予感させるものとなった。

今回の特集で寄稿された計五本の論文は、こうした二年間の研究会の蓄積を忠実に反映させるにはまだ本数が足りないといわざるをえないが、上に掲げた三つの主題群の方向を示すには足りるものとなっていると考えている。以下に研究会での報告との関連を中心に五論文の簡単な紹介をおこなって特集の前書きに代えたい。

今西 一 帝国日本の自画像－1920年代の朝鮮「同化」論

これは氏による報告（「文明化と身体」1995年7月8日）とは別に、新たに書かれた論文である。戦前の日本を「多民族帝国」として見直す近年の研究動向、そして「冷戦」後のアジア諸国における「国民国家」イデオロギーの再編の動きをふまえて、一九二〇年代の「同化論」に、今も根づく生き続ける朝鮮植民地化正当化論の祖形を見定めようというこの試みには説得力があると思われる。おそらくそれは氏が海外研究で韓国に滞在し、緊張感に満ちた位置でこの論文を書かれたことにもよるのであろう。

小熊英二 虚妄の「アジア」－岡倉天心のアジア像の変遷

これは小熊氏による同題の口頭報告（1996年10月11日）のもととなった論文である。「アジアは一つ」という言葉で有名な岡倉天心がそのアジア観をどのような歴史的、個人史的文脈で、どのような動機から形成したかを跡づけるこの試みでは、『東洋の覚醒』『東洋の理想』『日本の覚醒』が検討され「わずか二年余りほどの間に執筆された三つの著作において、これほど激しい振幅で、しかもかなり整合的に行われた「アジア」認識の変化は、たんなる思想的変遷や矛盾というより、意図的な作為を思

わせる」という見方が示されている。この研究会の方向の定位にも直結する天心をどう評価するかという問いへの鋭い問題提起と受けとめられる。

中川成美 ツーリズムと国民国家―書記される<西欧近代>

氏による報告（「ツーリズムの夢―国民文化と西欧体験」1995年11月4日）の主題を展開した論文である。十九世紀半ば以降の西欧におけるツーリズムとしての旅行が戻るべき起点としての国民国家の成立を前提としていることの指摘から始めて、そうした旅行スタイルの日本への波及を史実として跡づけたうえで、明治期以降の日本文学における「旅行記」の文体の陰影に、国民国家として成立した日本の「威光」と西欧への「劣等感」の微妙な交錯を読み取る試みは、上記の第一の主題群に対してひとつの充実した回答を与えていると思われる。

中村忠男 ヒンドゥー・バザールプリントの形成と「母なるインド」：現代的なヒンドゥー教の表象をめぐって

研究会報告（「インド的なもの」の形成と「ひとつのアジア」―岡倉天心とヴィヴェーカーナンダの場合」1996年11月30日）およびその基礎作業ともいえる比較文化研究会での報告「ヒンドゥーバザールプリントとナショナリズムの絵画」を発展させた論文である。大量生産され現代文化にも深く浸透した「バザールプリント」のイコノロジーの源泉をたどりながら、近現代のインド絵画が、ナショナリズムの諸潮流と、とりわけ「国」をイメージ化する女性像に表れるその表現論、印刷技術、そして大きな文化的背景としてのヒンドゥー教の交差するなかから形成されたことを検証している。そのインド絵画と岡倉天心との関わりについては次の機会に立ち入って検討されることが期待される。

渡辺公三 Interroger le Sphinx: Genèse et structure de la modernité identitaire

これは口頭報告（「登録装置としての国家―「満洲国」における指紋」1996年9月27日）の原稿を仏語訳したものである。その経緯は論文の日本語要旨の部分に書かれているので参照されたい。

以上見られるとおり、五つの論文の内容は多岐にわたり、統一的なイメージを結ぶものとは思われないかもしれない。しかし対象として設定された歴史的時期におけるさまざまな地域における動態に照明を当てるための、新たな視点の探求という共通性は感じとっていただけると確信している。また執筆者の研究経歴上の出自も歴史学、社会学、文学、神話学、人類学など多方面にわたり学際的な研究を目指すこのプロジェクトの志向を表現するものとなっている。今後は最終年度へ向けて問題意識をどのように絞りこんでゆくか、参加者の力量と一層の熱意が問われよう。

1997年1月